

序

発行にあたって

多くの先達によって確立された日本の消化器外科手術の標準術式は、合併症発生率、長期成績、いずれの観点からも世界に冠たる高いレベルを誇っていることは、皆さま、異論のないところと存じます。「手術」誌は、この日本の伝統的技術を次の世代に脈々と継承していくうえで、一定の貢献をしてきたものと自負しております。

一方、標準的術式のなかで、さまざまな「流儀」が存在していることも事実です。これまで、リンパ節郭清範囲の比較や、各領域における低侵襲手術の安全性および長期成績の検証を目的に、ランダム化比較試験が行われてきましたが、臨床試験を行うことが事実上困難な課題も数多く残されています。標準的術式のなかに包含されている個々の外科医の「流儀」や「方針」は、科学的根拠に加え、それぞれの外科医の経験と信念に基づいて形成されていることも少なくありません。今回はあえて、「異なる」あるいは「対立する」主張が存在する領域、トピックを選択し、現時点 2020 年における誌上ディベートを、「手術」誌の臨時増刊号特集として企画いたしました。

それぞれの主張には、客観的なデータだけでなく「こうすれば上手くいく、こうすることで解決する」といった外科医ならではの「コツ」が存在しています。そうした観点から今回は、主張を裏付ける理想の「手術手技」についても解説していただくことといたしました。

私どもが主催させていただく第 120 回日本外科学会定期学術集会（2020 年 8 月 13～15 日、パシフィコ横浜ノース）でも、重要な企画としてチームディベートセッションを設け、聴衆の意見をリアルタイムにアンケートしながら、演者同士が真っ向から対決する場を設けました。セッションの最後には医学的な観点からの聴衆の意見に加え、「ディベートとしてどちらが優れていたか」を判定する機会も設けています。国民性として「相手を攻撃し、自らの正当性、優越性を主張するディベート」は日本人に向いていないと言われています。しかし、これからの外科学を担う日本の若手には、是非ともディベート力をつけて世界で闘って欲しいと願っています。日本の優れた消化器外科手術を普及させるには、科学的検証に加えてディベート力も重要であると考えています。

本特集では、各領域の最前線でメスを握っているエキスパートの先生方に執筆をお願いし、舌鋒ならぬ「筆鋒」鋭く、論戦を展開していただきました。本特集の大きな目的の 1 つは、まったく異なる意見を平等かつ公平に並べることで、読者自身にしっかりと考えていただくことだと思っています。また、本特集に収載された「論点 2020」の本当の答えは、何年かののちに「歴史」が示してくれるものと思います。2020 年の消化器外科医たちがどのように考え、どのようなビジョンをもって消化器外科標準手術のさらなる発展に取り組んでいたのか、貴重な歴史的資料にもなるものと期待しています。

本特集の発行にあたり、貴重な時間とデータをご提供くださったすべての執筆者の皆さま、ワクワクしながら本書を手にとって下さっている読者の皆さまに心より感謝申し上げます。

2020年3月

「手術」編集委員

北川 雄光

慶應義塾大学一般・消化器外科教授